

未来



全労協・郵政産業労働者
ユニオン長崎中郵支部
機関紙・「みらい」
NO. 4054
20年5月12日(火)
Tel・Fax 095-828-1953

社会はあるのか

おはようございます。

社会はあるのか。

コロナ危機で問われる国と人の生き方を考える。

九日の朝日新聞の「多事争論」で、「社会はあるのか」と書いた。



一九八七年にイギリスのサッチャー首相が、新自由主義の勝利宣言として発した言葉、「社会などとは存在しない。あるのは個人と家族だけだ」に変化が・・・で。

自身もコロナ肺炎で入院したイギリスの保守党のジョンソン首相が、「今回のコロナ危機で、すでに証明されたことがある。社会というものは、本当に存在するのだ」と述べたと。サッチャーの勝利宣言を、同じ保

守党の党首である首相が否定したからだ。事件だ。

背景はこうだ。イギリスのコロナ危機で、首相が医療崩壊を回避するために、退職した医師や薬剤師に復職を呼びかけたところ、二万人が応じ、七五万人の市民がボランティアに名乗りを上げたことへの感謝の言葉だそう。

では「社会は確かに存在するのか」。これを書いた朝日新聞の郷富佐子論説委員は、「日本にそれはあるか」と問うている。

答えは明白である。全地球的、あるいは国家的危機の時代は、新自由主義のいう「自己責任」では何も解決しないばかりか、阻害となる。医療費、社会福祉、公務員削減が、いまのコロナ危機解決の遅れの根底にあるからだ。

百年に一度のパンデミックのコロナ肺炎の感染症は、新自由主義のいう「自己責



任論」を吹き飛ばした。このコロナ危機からの脱出策は、医療体制の充実、最低生活保障のための緊急生活支援金の支給であることは、世界のどの国も同じことをしているのだから、間違いなく、これしかない。

国が国民の最低生活を保障する制度。これこそ社会主義の基本中の基本である。新自由主義は言った。国民は結果の公平でなく、機会の公平がある限り、結果の不平等や格差は個人の責任であり、個人が受忍すべきことなのだ。

そしてコロナ危機がきた。国の政治の一番の役割は、国民の命を守ることだ。コロナ菌の感染拡大をいかに抑え、経済と生活のバランスをうまく取り取るかが政治である。日本では国が国民一律にマスク二枚と十万円を支給すると決めたが、これで一年続くだろうといわれるコロナ危機の自粛要請を乗り切るころができるのだろうか。

もう一度、日本に「社会

はあるのか」である。社会という言葉は日本には明治までなかった。多分似たような言葉は「ムラ」だろう。英語でいう social (ソーシャル) の語源はラテン語で「仲間」だ。これを日本語で「社会」と訳したのは福地源一郎である。(広辞苑)。

福地は日本初のジャーナリストだが、長崎の人で医者の家系から英語ができた。幕末期に幕府の役につき、幕末の対米交渉団に通訳として同行し、アメリカに渡っている。二度の欧州留学などで、先進国の政治や社会を学び、中江兆民と学校をつくり、日本初の『江湖新聞』を発刊した。また一橋大学(旧商法講習所)には、福地がこの講習所の副会頭であったことから、彼



が書いた学校の木製の門札が今も飾ってある。

では、「人間が集まって共同の生活を営む場」だろう。それを下支えるのは、競争でも自己責任でもない、連帯

だろう。人は土壇場では、助け合うことでしか生き延びることはできない。



もっと突き詰めれば、社会のそれは「情」ではないかと思う。情の字の左の立身遍は人を意味し、右の人の体を意味する「月」の上の字の元は「生」であるそう。白川静の『常用漢字解』から。生とは草木が生えはじめる意味で、人というなら若い世代をいい、人として、子供のころからもつ心を意味し、情は他人を思いやる心が、人の原点なのだ。

ポスト・コロナ禍の国家は、いかにあるべきか。コロナ感染症で、新自由主義と国家主義では人を助けられない。この教訓が明らかになれば、災い転じて福を成すこととなる。人は助け合いで社会を成すからだ。

期間雇用パート労働者の皆さん! 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1集-海江田, 2集-向井, 3集-山田, 支部・分会の役員へ。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員の希望を主張の正社員化を。

ゆたかに均等待遇をめぐって差別。

ユニオンは労基法裁判に勝利した。